『つながる世界』～知ろう考えよう、世界と日本のこと～

2017年９月　国際交流・図書

夏休みに海外へ出掛けた人、旅はいかがでしたか。ホームステイをした人、家族とうまくコミュニケーションできましたか。そして日本で夏休みを過ごしたみなさん、２学期も世界を知るいろいろな本を紹介しますよ。

わかり合うことの難しさ　～初めてのホームステイ in Japan～

『ジャパン・トリップ』（岩城けい）はオーストラリアの小学６年生たちの日本での１週間を描いた小説。ホストファミリーや親友に対して小さなストレスをためていく生徒、英語では「〇〇、OK?」と言うのが精一杯だが預かった生徒を我が子のように心配するホストマザーなど、人間の胸の内がよく描かれている。

勉強した日本語が思うように使えないもどかしさ、逆にそれが通じたときの喜びなど、ホームステイの経験者には共感できる部分も多いだろう。給食のない国からやってきた小学生にとって日本の「給食」はとても豪華。それなのになぜ清掃人を雇う余裕はなくて生徒が掃除をするの？　そんな素朴な疑問にあなたならどう答えるだろうか。自分にとっては当たり前なことを説明するのは意外と難しい。豪州在住の作者には他に『さようなら、オレンジ』、『Masato』という、オーストラリアで生きる日本人を描いた作品もあり、こちらもオススメ。

トイレで慌てたことは？　～快適な旅行・生活のためのサインとは～

例えばベトナムを旅行中にトイレの入口に「WC NỮ」と「WC NAM」と表示があったら、あなたはどちらのトイレに入るだろう。現地の言葉で「男」と「女」のつづりがわからないために戸惑うことが昔はよくあった。今は駅や空港などの公共空間ではピクトグラム（絵文字）によって比較的わかりやすくなっている。だが、ある外国人が日本の空港のトイレで用をすませたとしよう。さて水を流したいのだがボタンが多すぎてわからない！押したのがたまたま「非常呼び出しボタン」だったりすると…もう最悪。

『街の公共サインを点検する』を読むと、理解しづらいサイン、誤解を招くサインなど、日本で目にする各種サインの問題点が見えてくる。外国人から見ると変な英語表現や、禁止・規制サインを特定の言語で表示することで差別や偏見を助長する危険性もあるという。２０２０年の東京オリンピックを控え、なかなか興味深く考えさせられる一冊。

自分だけの地図を持って旅に出る　～日系アーティストの足跡を追って～

食・自然・芸術・歴史など旅の目的は様々。海外旅行の初心者であればそれらがほどよくパックされたツアーを選ぶのが無難だろう。そして慣れたら自分だけの地図を持って旅に出るのもよい。

『アメリカを変えた日本人』（久我なつみ）は国吉康雄、イサム・ノグチ、オノ・ヨーコの３人のアーティストの足跡を合衆国でたどる物語。国吉康雄は岡山市出身で明治末期に１７歳で渡米。洋画家となってアメリカで高く評価された作品は岡山でも見られる。彫刻家のイサム・ノグチは石の彫刻から和紙を用いた光のオブジェ（球形の照明で住宅でも見かける）など、香川にある彼の美術館以外でも作品は身近なところにある。オノ・ヨーコは芸術家としてアメリカのみならず世界に影響を与えてきた。先日NHKの「ファミリー・ヒストリー」でも語られていたように、父方の祖母は岡山の人である。

３人の足跡をたどる途中で筆者が向かうことになったのは、合衆国西部の砂漠にある「マンザナール日系人強制収容所」の跡である。強制収容と聞けばナチスによるユダヤ人に対するものが思い浮かぶだろう。しかし、同じ時期にアメリカでは日系人（配偶者が日系人の白人、日本人の血が１６分の１以上の混血を含む）に対し、財産も地位も奪って隔離する徹底的な政策が行なわれた。これは後に人種差別と人権侵害としてアメリカ国内で問題になった。夏は５０℃を超える暑さ、冬は極寒の砂漠の収容所で人々はどのように生きたのだろうか。

そんな収容所からの帰り道、筆者の目の前の砂漠には現在のアメリカを象徴する巨大で衝撃的な光景が広がる。それは…（ラスベガスではありません）。日本（日本人）と関係のあるスポットを加えた地図を持つと、旅はひと味違ったものになるだろう。

日々伝えられる世界のニュースは所詮、他人事に思えるかもしれない。でも、もしそれが自分の訪ねたことのある国だったらどうだろう。もしそれが自分の知っている人の住んでいる国だったら？　そしてその知り合いが家族のように親しくしている人や友達だったら、もうそれは他人事とは思えなくなるだろう。

「外に出て、人とつながる」とは、自分や世界をそのようにして変えていくことではないか。たとえ敵対している国であっても、そこに自分の知り合いがいたらきっとその人のことを思うはずだ。ジョン・レノンとオノ・ヨーコの作った「イマジン」は、目に見える物理的な力ではなく「想像」という見えない力の可能性を歌っている。

（文責　武田）